

新年礼拝

## 寄留者を虐げてはならない

2022年1月4日

学院長・宗教総主事 嶋田 順好

### 聖書:レビ記 19章 33節～34節

<sup>33</sup> 寄留者があなたの土地に住んでいるなら、彼を虐げてはならない。<sup>34</sup> あなたたちのもとに寄留する者をあなたたちのうちに土地に生まれた者同様に扱い、自分自身のように愛しなさい。なぜなら、あなたたちもエジプトの国においては寄留者であったからである。わたしはあなたたちの神、主である。

.....

### 聖書:エフェソの信徒への手紙 2章 14節～22節

<sup>14</sup> 実に、キリストはわたしたちの平和であります。二つのものを一つにし、御自分の肉において敵意という隔ての壁を取り壊し、<sup>15</sup> 規則と戒律づくめの律法を廃棄されました。こうしてキリストは、双方を御自分において一人の新しい人に造り上げて平和を実現し、<sup>16</sup> 十字架を通して、両者を一つの体として神と和解させ、十字架によって敵意を滅ぼされました。<sup>17</sup> キリストはおいでになり、遠く離れているあなたがたにも、また、近くにいる人々にも、平和の福音を告げ知らせられました。<sup>18</sup> それで、このキリストによってわたしたち両方の者が一つの霊に結ばれて、御父に近づくことができます。<sup>19</sup> 従って、あなたがたはもはや、外国人でも寄留者でもなく、聖なる民に属する者、神の家族であり、<sup>20</sup> 使徒や預言者という土台の上に建てられています。そのかなめ石はキリスト・イエス御自身であり、<sup>21</sup> キリストにおいて、この建物全体は組み合わされて成長し、主における聖なる神殿となります。<sup>22</sup> キリストにおいて、あなたがたも共に建てられ、霊の働きによって神の住まいとなるのです。

厳しい寒波が襲来するなかチャペルに集い、主の年 2022 年の新年礼拝を共々に守れます幸いを主に感謝せずにはいられません。創立 136 年目を迎えた宮城学院の歩みが、コロナ禍をはじめとする様々な試練はあるにしても、逃れの道を備えてくださる主の導きと支えに信頼し、実り豊かなものとなることを願いつつ思いと心一つにして歩んでまいりましょう。

ところで、今世界が直面している最大の問題を一つ挙げよと言われれば、いろいろな考え方があるにしても、多くの人々が、地球温暖化に基づく気候変動と答えるのではないのでしょうか。一方、日本が直面する最重要課題は何かと問えば、これまたいろいろな答えがあり得ると思いますが、宮城学院に身を置く者としては「少子化」と言わざるを得ません。

2021年6月4日に厚生労働省が発表した2020年の日本の出生数は、コロナ

禍ということもあって前年より2万4407名も少ない84万832名でした。1899年の調査開始以来、最も少ない人数になったということです。宮城学院には、こども園、中高もありますが、事柄を分かりやすくするために、ここでは大学に焦点を絞ってお話しますと、18年後にはこの出生者数から私たちの大学に入学者を迎え入れることになるわけですね。ちなみに2021年に18歳となった人が生れた2003年の出生数が112万1000人でしたから、この18年間で、約28万人もの人口減少があったことになります。それはほぼ25%の人口減少に相当します。

まさしく土砂降り状態ともいえる少子化傾向のなかで、はたして宮城学院には持続可能な道が残されているのでしょうか。たとい今々は存続することができたとしても、このまま手をこまねいていけば10年後、20年後には確実に存亡の危機に瀕することは必定ではないでしょうか。

どうしたら少子化問題を打開し、克服できるのでしょうか。なによりもキリスト教学校として建学の精神を重んじつつ、他の学校にはない差異性とこの世のニーズに応える教育を展開することが肝要なことでしょう。その具体的な現れとして、さらなる学部学科改組や不断のカリキュラム改革に意欲的に取り組むことが喫緊の課題であることは間違いありません。それと共に私たちが真剣に考慮しなければならないことは、外国人留学生を酒田短期大学や東京福祉大学のようにずさんに受け入れるのではなく、しっかりとしたビジョンをもって、よき教育をなすために迎え入れるということではないでしょうか。

留学生と言えば、東北大学などの旧帝大に代表されるリサーチユニバーシティや首都圏・関西圏の大規模私立大学のことが真っ先に念頭に浮かぶかもしれませんが、また英語のみで単位を取得させるコースを設けることが不可欠と考える人もいるかもしれません。しかし、今の宮城学院に求められている留学生施策とは、グローバルな視点に立って、日本語の四技能をしっかりと身に付け、日本の通常の会社の総合職や地方自治体の公務員となり、着実に日本の社会に定着できる外国人留学生を養成するということにあると言って間違いありません。

すこし考えればすぐわかることですが、少子化問題はあくまで日本の国内問題であって、目をアジアや世界に転じれば、学びの意欲を持った大勢の若者が存在することは言を俟ちません。世界が人口爆発状況のなかにあるにも関わらず、日本がとりわけ深刻な少子高齢化に直面しているにすぎないのです。

コロナ禍がまだ収束を見ていないなか、いかにも荒唐無稽でリスクに満ちた方策と思われるかもしれません。しかしながら橋本俊詔さんの『日本の構造』によれば、このまま日本の少子化が進むと40年後には高齢者1人を1.4人で支えなければならない社会になってしまいます。つまり10年先、20年先を見越した場合、人口ピラミッドで日本人の人口構成を見れば、到底、日本人の勤労者だけで、高齢者世代を支えることはできなくなってしまうのです。まさに年金も保険も福祉も機能停止に陥るこ

とになりかねません。それはまさに日本国そのものの存亡の危機と言えます。

限界集落という言葉がありますが、その定義は「人口の50%以上が65歳以上で、農業用水や森林、道路の維持管理、冠婚葬祭などの集落として共同生活を維持することが限界に近づきつつある集落」を指しています。2019年に過疎問題懇談会が出した「過疎地における集落の現状把握調査」という報告によれば、東北地方の全集落の20%にあたる2839集落がすでに限界集落となっていることが明らかにされています。その視点から見ても、東北地方の地域社会そのものを持続可能にさせるためには秩序正しく外国人をしっかりと受け入れ、日本に定住してもらい、それらの人々の力を借りて、日本のインフラストラクチャーを維持していかざるをえなくなるということではないでしょうか。

それはまた、これまで技能実習生という名目のもとに、日本の労働力不足を補うための一環として、一時的に日本に外国人労働者を滞在させ、日本人がやりたがらない「きつい、きたない、危険」な仕事を委ね、雇用状況の調節弁として外国人労働者を都合の良い労働力として用いることからの脱却を目指すということにほかなりません。

そこで決定的に重要なことは、一般的に日本人の寛容さを示す教えと錯覚されている「和を以て貴しとなす」との聖徳太子の教えが根源的に持つ、強力な同調圧力と異質な他者を排斥しようとするエートスの克服ということになります。言い換えれば、外国の方々を迎え入れることによって、第二、第三の在日韓国・朝鮮人問題のような民族差別の悲劇を生み出すことなく、外国人の方々を「共に生きる隣人」として迎え入れる共同体を今から築いていかなければならない使命が、日本の国にはあるに違いないのです。言葉を代えていえば、真の意味での「開国」をしなければならないということでしょう。

「共生のための多様性宣言」は、なにもLGBTQの領域に関わるものだけではなく、「外国人との共生」という領域においても貫かれなければならない課題であるに違いないのです。その際、とりわけ自覚的にそのミッションに取り組むことが求められるのは、キリスト教学校ではないでしょうか。なぜならレビ記19章33節～34節に、さきほどもお読みした人道的な律法が掲げられているからです。

「寄留者があなたの土地に共に住んでいるなら、彼を虐げてはならない。あなたたちのもとに寄留する者をあなたたちのうちの土地に生まれた者同様に扱い、自分自身のように愛しなさい。なぜなら、あなたたちもエジプトの国においては寄留者であったからである。わたしはあなたたちの神、主である。」

さらにこのみ言葉の直前のレビ記19章18節には「復讐してはならない。民の人々に恨みを抱いてはならない。自分自身を愛するように隣人を愛しなさい。わたしは主である。」というみ言葉が記されていることもしっかりと覚えておきたいものです。

ところで少々視点を変えて「おもてなし」ということについてしばらく考察してみたいと

思うのです。この言葉が一躍脚光を浴びたのは、東京オリンピック開催が決まった2013年9月7日のブエノスアイレスIOC総会でした。プレゼンターの一人で今は衆議院議員の小泉進次郎さんのお連れ合いとなっている滝川クリステルさんが、「おもてなし」の一字、一字を区切るように強調しながら発音したことで聴き入る者に深い印象を与えたことでした。たしかに客人の気持ちを押し量りつつ、相手の身になって痒いところに手の届くまでの細やかな配慮で親切丁寧なおもてなしをすることは、日本人の美德と言ってよいかもしれません。

もちろん「おもてなし」が、ごく自然に日常的な振る舞いのなかで行われることはとても素晴らしいことだと思います。しかし、その長所や美点が、他国の人々と比較して日本人の民族的優位性として自己陶酔的に「だから日本人はすごいんだ」とナショナリズムを鼓舞する視点から盛んに喧伝され始めると、私はいささか鼻白んだ気持ちにさせられてしまいます。というのも、ルカによる福音書18章9節～14節で主イエスが語った、自分は正しい人間だと自惚れて他人を見下している人への警告の譬えを彷彿させられてしまうからです。

「二人の人が祈るために神殿に上った。一人はファリサイ派の人で、もう一人は徴税人だった。ファリサイ派の人は立って、心の中でこのように祈った。『神様、わたしはほかの人たちのように、奪い取る者、不正な者、姦通を犯す者でなく、また、この徴税人のような者でもないことを感謝します。わたしは週に二度断食し、全収入の十分の一を献げています。』ところが、徴税人は遠くに立って、目を天に上げようとせず、胸を打ちながら言った。『神様、罪人のわたしを憐れんでください。』言っておくが、義とされて家に帰ったのは、この人であって、あのファリサイ派の人ではない。だれでも高ぶる者は低くされ、へりくだる者は高められる。」

ここに登場してくるファリサイ派の人は、神殿で祈りをささげています。しかし、果たしてこの祈りは神へのまことの祈りとなっているのでしょうか。率直に言って祈りの形をとった「独り言」でしかないのではないのでしょうか。なぜなら彼がやっていることは、要するに徴税人と自分の歩みを比較し、自分がどんなに優れた信仰生活を送っているかを誇り、自慢しているにすぎないからです。彼の思いの背後には「自分はこんなに立派な善行を積んでいるのだから、神よ、当然あなたは私を特段に顧み、報いてくださいますよね」という具合に、神と取り引きする思いがあるのです。所詮、彼の関心は自分の立派な信仰、自分の秀でた善行、それに基づく自分への報いであって、本当の意味で神との祈り、神との生ける人格的対話へと突破しようとはしていません。あくまでも自分の、自分による、自分のためだけの功績が関心の対象なのです。まさにナルキッソスのように自分の善行に見惚れ、「どうです！わたしは立派でしょう」と大いなる自己陶酔のなかにたゆとうしているだけなのです。その限り、彼にとっては、神もまた自分に華を持たせるためのアクセサリーと化していると言えるでしょう。

最近、気がかりなことはネット上に出てくる日本の「おもてなし」文化を誇る言説のなかに、自己礼賛的、自己陶醉的なものが頻繁に出てくることです。そこで問われなければならないことは、お金を落としてくれる外国人観光客は「おもてなし」の対象とし、しかもその「おもてなし」の素晴らしさに自己満悦はしても、その外国人が定住者として共に生きる存在となるとなれば、途端に手のひらを返して排斥することになるのではないかという危惧です。つまり「おもてなし」と「排斥」は、一つの事柄の裏表にすぎないのではないかという問いです。

日本における外国人へのおもてなしが、閉鎖的、排他的なものに通底しているか否かを測る一つの基準として、私たちがしっかりと心に留めなければならないことは、先進7ヵ国における一年間の難民認定数です。時間がないのでそのことについてここで詳しく語ることはできませんが、日本国が認定した難民受け入れ数は、2018年42名、2019年44名、2020年47名にすぎません。国連難民高等弁務官事務所が2021年6月に発表した統計によれば、日本が47名の難民を受け入れた2020年にドイツが受け入れた難民の人数は120万人、トランプ大統領のもとにあったアメリカ合衆国でも30万人の難民が受け入れられています。日本は恥じらなければならないほどにわずかな難民しか受け入れていません。

その文脈のなかで名古屋出入国在留管理局に収容されていたスリランカ人女性ウイシュマ・サンダマリさんの死という出来事も生じたのではないのでしょうか。つくづく難民の受け入れに関して、日本は、未だに鎖国に近い状態が続いていると思わずにはいられません。

難民受け入れと留学生受け入れは、本質的に異なる次元の問題と一蹴することもできるでしょう。しかし、私には、その二つの問題が、根っこのところでは結びついていると思うのです。

以上のことを考察してみると、なにより「神を畏れ、隣人を愛する」ことをスクール・モットーに掲げるキリスト教学校こそは、そのような状況を踏まえて、日本のためにも、志のある外国人の若者のためにもキャンパスを開国すべきなのではないのでしょうか。

なぜなら創立者のウィリアム・E・ホーイ宣教師も、エリザベス・R・プールポー初代校長も、言語、文化、宗教の異なる異質な他者が住む日本、しかもそこでは300年近くも酸鼻を極めた切支丹弾圧がなされてきた日本に神の召しに答えてアメリカからやってきたからです。なぜか。それは人格として尊重されず、十分な教育機会を与えられていなかった当時の日本の少女たちのためにキリストの愛に基づいて教育の機会を与えるためにほかなりません。それはまさにミッション・イムポッシブルとも言える冒険的な歩みと言えるでしょう。

確かに外国人留学生を受け入れ、教育・研究することは多くの困難と労力が求められることでしょう。しかし、創立者をはじめとする多くの宣教師たちが、多大な困難

を引き受けて果敢にその使命を担ってください、宮城学院は今日あるを得ているのです。その創立者たちの志を継承すれば、豊かな先進国のなかにある日本のミッション・スクールが、途上国、中進国の向上心ある女性を迎え入れて学びの機会を提供する信仰の冒険に歩み出すことは、建学の精神に最もかなっていることではないでしょうか。そしてその使命を全うするというのが、宮城学院女子大学、中高、こども園の持続可能性ということを考慮する時、避けて通れない課題であるに違いないのです。

最後にエフェソの信徒への手紙 2 章 14 節～16 節を朗読したいと思います。

「実に、キリストはわたしたちの平和であります。二つのものを一つにし、御自分の肉において敵意という隔ての壁を取り壊し、規則と戒律づくめの律法を廃棄されました。こうしてキリストは、双方を御自分において一人の新しい人に造り上げて平和を実現し、十字架を通して、両者を一つの体として神と和解させ、十字架によって敵意を減ぼされました。」

このキリストの十字架にいたるまでの愛をもって、学ぶ意欲のある志豊かな外国人留学生を迎え入れること、言い換えれば真の意味でのキャンパスの開国をはかることこそが、建学の精神に即した宮城学院の持続可能な成長を願うときに不可欠な課題であり、使命にほかなりません。